

【書 評】

小原友行著『初期社会科授業論の展開』

(風間書房, 1998)16,000円

片 上 宗 二

(広 島 大 学)

小原友行氏の20年に及ぶ研究成果が、公刊された。題して『初期社会科授業論の展開』。平成8年(1996年)、広島大学に提出された学位論文の公刊である。

まずは、本書の構成を紹介しよう。次のようである。

序 章 本研究の意義と方法

第1章 初期社会科授業論の課題と類型

第2章 「生活学習」型の授業論

第3章 「生活問題解決学習」型の授業論

第4章 「社会問題解決学習」型の授業論

第5章 「研究問題解決学習」型の授業論

終 章 初期社会科授業論の意義

この構成から、本書を、問題解決学習論を踏まえた社会科授業論書と、読みとられる方がいるかもしれない。そのように受け取ってもらってもよいほど、本書は理論書の色彩を帯びている。実際、そのような観点からも多くの示唆を提供するものとなっている。

とはいえ、本書は、初期社会科に関する次の3タイプの研究、①成立史研究、②教科論・カリキュラム論史研究、③実践史研究のうち、第3のタイプ、つまりは実践史研究に位置づくものと見るのが妥当であろう。

というのも、各章とも、(1)成立・展開過程、(2)カリキュラム編成、(3)単元の授業構成、(4)授業論、(5)授業論の特質と意義、という構成になっているからである。ちなみに、第3章を取り上げて少し紹介すると、次のようである。

第1節 「生活問題解決学習」型授業論の展開

第2節 「子どもの生活課題の解決学習」

—合科カリキュラムの実践—

第3節 「子どもの具体的問題の解決学習」

—社会科問題単元の実践—

第4節 広島県における実践

第5節 高知県における合科カリキュラムの実践

—高知師範学校第一附属小学校「附小プラン」—

第6節 「生活問題解決学習」型授業論の特質
とその意義

ここまで紹介すれば気づくように、小原氏の研究は、これまでの実践史研究を大きく転換させたものになっている。同じ実践史研究であっても、従来のそれは、実践の成立過程やカリキュラムの構造等の解明に留まり、前記の①や②のタイプの研究との区別が不明確であったのに対して、小原氏の場合は、次のような明確な研究方法論に立っての研究となっているからである。

…多様な初期社会科授業実践の展開を戦後社会科が担った歴史的課題に对应していく取り組みととらえ、「問題解決」を方法原理とする授業論の観点から、全国的に大きな影響を与えた実践、全国的動向から直接影響を受けた広島県の実践、間接的な影響を受けながらも独自の展開を見せた高知県の実践を、「生活学習」「生活問題解決学習」「社会問題解決学習」「研究問題解決学習」の4類型に分けたうえで、各類型内でどのような授業論が構築されたのか、それらは課題をどこまで解決していたのか、残された課題は何であったのかを検討する。

本書の特長は、実践史研究といえども明確な研究方法論が必要なこと、また明確な研究方法論に立つと実践はどのように整理され、どのように特質付けられるのかを具体的に示していること、さらには、実践の全体像を中央と地方の動的な関係で描き出していること、の3点に集約されよう。その意味で、本書は、社会科実践史研究に新しい光を投げかけた注目の書であると同時に、今後、初期社会科の研究を志す全ての人にとっての導きの書であり、また対決すべき書でもある、と言えよう。